



河上肇記念会会報

NO. 39

1992・1・1

目 次

河上肇と孫文……………	一 海 知 義	1
河上会 あの人 この人		
内田穠吉さん……………	小 嶋 康 生	1 2
河上肇の小泉信三あて書簡……………	杉 原 四 郎	1 7
一九九一年度会計報告……………		2 1
〔一九九一年度記念会総会〕……………		2 2
総会本記と雑感		
開会挨拶（杉原四郎）		
編集後記……………		2 7

（表紙写真）1991年度総会

講演の林直道先生（左）

杉原四郎世話人代表（右）

河上肇と孫文

一海知義

本稿は、一九九一年五月十八日、大阪郵政会館で開かれた「河上肇没後四十五年記念の集い」での私の講演「河上肇と孫文」の記録に、いささかの補訂を加えたものである。

私は講演の中でときどき冗談をいう悪いクセがあるが、それらは削除し、時間の制約で十分紹介できなかった資料等は、これを補うことにした。

本日は河上肇記念会の代表世話人である杉原四郎さんが、お集まりの皆さんへのごあいさつを兼ねて、「欧米人の見た河上肇」と題する講演をされる予定でしたが、ご病気のため私が代役をつとめることになりました。たいへん残念ですが、まもなく回復されて、同題の講演をおききすることができると思いますので、本日のところは

はご辛抱ください。

さて、私の今日の話のあら筋は、一昨日（五月十六日）の『毎日新聞』夕刊に書いておきましたが、今日は少し詳しく資料を補いながらお話したいと思います。

昨年（一九九〇年）の暮、十二月二十九日に、高知県の土佐清水市に住んでおられる浅野忠志さんという方から、お手紙をいただきました。この方とは、河上肇のことが縁で、時々文通していたのですが、この時は手紙にそえて一枚の新聞切抜が同封されておりました。

新聞は『高知新聞』、日付は昭和二十一年二月十三日。切抜の表題は「河上博士を憶ふ」とあって、「東京にて田村生」と筆者の姓だけが書いてあります。

河上さんが亡くなったのは、日本敗戦の翌年、昭和二十一年の一月三十日ですから、この新聞はその二週間後

に発行されたものです。

文章は二十二行八段組（四百字詰原稿用紙にして六枚ほど）のかなり長いものですが、河上研究家もたぶん今まで気づかなかった（天野敬太郎『河上肇博士文献志』も未収録の）たいへん珍しい資料のようですので、まず全文をご紹介しますことにいたします。

コピーに不鮮明な箇所があり、あらためて高知新聞社からコピーを送ってもらいましたが、なお不明な箇所が残り、これは無理に判読せず、その旨注記しておきました。

河上肇君と銀座の「よしかは」の階上で牛鍋をつつ突きながら、社会主義の談義に数時間を費やした後、その夜遅く袂を分つたのはいつのことであつたか。あれは確か明治四十年であつたと思ふ。当時河上君は読売新聞社に在り、付録ページの学術科学面を担当してをり、僕は読売本紙の政治面編輯を受持つてゐたが、学術科学ページは一週一回、他の文芸面教育面といったものと交互に出てゐたため、君は毎日出社するの要なく出社してもその原稿を整へておくだけのことで、一日を社内で過したのは担任面発刊の前日位であつた。従つて君と語り合ふ

のもこの日位のものであつたが、沈黙にして寡言なる君は編輯上の要談以外、座談に没頭するやうなことは無かつた。しかも編輯主任者の会議などではその担任面のみでなく全紙面に亘りこれが刷新と向上発展につき熱烈なる意見と主張とを吐露して已まなかつた。

河上君の「社会主義評論」が読売新聞に連載されたのはその二年程前のことであるが、千山万水楼主人の匿名で出したその評論が如何に世の注目を惹いたかはこの評論掲載以来発行部数の忽ち激増した事実が何よりもこれを証明して居る。いはゆる洛陽の紙価して高からしめたものである。君はその評論において先づ近世社会主義勃興の主要原因が人類平等の思意と財産重視の思想とに在ることを説き、しかして政治上の自由平等は経済上の自由平等あることに依つて始めてその実を満すことを得、畢竟社会各方面における人類の不平等救済は、先づ経済的平等を得ることに依つて期することが出来る。しかしして之が目的を達するの要件は即ち土地資本の公有、生産の公営、分配の公平を得しむるに在るとて、マルクスの唯物史観を引用し、社会変遷の真因は経済組織の変造に外ならざる所以に言及しつゝ、近世経済社会の特徴を挙げ、もつて社会主義發達の過程を明かにすると共に、こ

れに論評を加へて、その利弊の存する所を指摘しながら、わが国の官僚および学者等が偏狭固陋以て社会主義を危険視し蛇蝎視する誤謬想該見に犀利なる筆刃を下した。

当時、君尚ほ若く、所説亦之に準ふもの無しとしなかつたが、この評論一たび出づるや官界、学界、実業界等に深大の衝動を与へたのは勿論、平民社一派の主義者連に對しても大い警醒せしむるところがあつた。君はこの評論において屢々平民社一派の行動に言及し忌憚なき論評を加へた。併し君の社会主義に対する肯定是認の態度はこの評論を通じて十分に感取せられたのみでなく、君自ら理論闘争の第一線に立つことをも辞せざるべき氣魄をしめしたのであつた。たゞ評論の結果が「無我の愛」への信仰によつて竜頭蛇尾の觀を呈したのは遺憾であつた。

これも君が在社當時のことである。その頃日本に亡命していた孫逸仙、日本名高野氏を僕の案内で牛込築土の寓居に訪ねたことがある。高野氏は、日本語がまづく英語で話さねばならなかつたので会談は相当不便であつたが、君は支那の農村問題、農民問題等を主題として話したやうであつた。帰途、支那革命の前途なほ容易でないことを嘆じてゐたのを記憶する。

その後京都から上京の際相会したのは兩三回であつた。爾來相会ふの機会なきうちに君は圉圉の人となり、やがて出でて東京荻窪に人目を憚る生活に入つた。といふのは刑事付き添ひの窮屈なる生活であつたからで、一日訪問した僕も執拗なる刑事の用件質問に閉口して遂に面会せず、帰つたほどである。それから後のことであつた、中央線の電車の中で一回和服姿の君が依然刑事に付添はれながら何処かへ行くところを見て挨拶を交はしただけで別れた。それが君と相会ふの最後であつた。

その河上博士が京都の仮寓で逝去したことを新聞で見たとき、懐旧の情に耐へなかつた僕は忽ち若き日の君を思ふと共にアノ「よしかは」で相語り、出でて京橋の橋の袂で相別れたときの君の姿が眼前にちらついて來た。瘦軀にして眉目清秀。一見いかにも弱々しく穩かな學者肌に見えるが、その穩かな相貌の裡に鬱勃たる氣魄を蔵してゐることは十分に窺ひ知ることが出來た。その瘦軀の君が榮養失調で逝去したといふ。如何に瘦せ衰へて逝つたことであらうか。おもへば悲痛の極みである。

今や世を挙げて榮養失調に陥りつゝある。失調に困る死の路をたどりゆく者は固より河上博士ひとりでは無い。今、および今後果して幾千、幾千万を算へねばならぬの

か。飢餓が日夜に、否な刻々に迫りつゝあることはわが国民の自ら感知しつゝある所であり、それは聯合軍司令部の警告を俟つまでもない。しかもそこには一部の栄養満点者がいる。およそ敗戦国日本の現状とは全く懸け離れた社会がわが国の一部に存することも疑ひなき現前の事実であつて、少くとも彼等が、失調、飢餓などは何処吹く風とばかりに、いささかの痛痒をも感ぜざる特殊の存在であり特殊の階層に属する者なることを知る大衆国民は、彼等を惡むと共にかくの如き不合理不都合なる懸隔が何に基因するか。それは敗戦日本のこの惨々一字不明が、何に基因し、何者によつて作爲せられたかの糾明と共に、この基因を如何にして排除し、如何にして打壊絶滅し得るかの、痛切深刻なる思考と透徹真剣なるその果敢なる実行とが、今、九十九パーセントのわが国民懸命の喫緊課題であることは更めて説くまでも無い。この時に當つて「社会主義評論」以来四十有余年。その間、わが国社会運動の進展は如何にも遅々たるものがあるが、その主因が官僚軍閥の圧迫に在ることはいふまでもない。かかる圧迫、かかる弾圧の下において、その信念、その主義、その主張のために苦闘を重ね來つた博士河上君を亡うたことが、まことに民主日本国再建途上

の重大損失であることは敢て僕の贅言を俟つまでもあるまい。(二一・二・五)

以上が「河上博士を憶ふ」の全文です。私はこの文章を、たいへん興味深く読ませていただきました。とりわけ河上さんが孫逸仙、すなわち中国革命の父といわれる孫文と会見した、というのは、今まで全く知らなかった新事実です。八十年以上も前の出来事を新事実とよぶのもヘンですが、現在の河上研究家の誰もが知らなかった事実かと思ひます。

しかし、ほんとうに事実かどうか、確かめてみる必要がある、と私は思ひました。そして、要調査事項を次の三つに分けてみました。

まず、A。執筆者の「田村生」とは誰か。明治四十年頃、読売新聞の政治面を担当していた記者だというのが、そういう記者がいたかどうか、フルネームは何というのか。また、まことに失礼ながら、信用できる人物なのかどうか。

次に、B。これは三つに分かれます。

1、河上肇の読売在社期間と、孫文の滞日期間とに、重なる部分があるかどうか。もし重ならないとしたら、

さきの事実はウソか、または田村氏が会見時期について思いちがいをしているか、そのいずれかになると思います。

2、孫文の東京における寓居は「牛込築土」とあるが、事実かどうか。

3、孫文の日本名は「高野」だったというが、これも事実かどうか。

そして以上のA・Bがいずれもプラスの方向で確かめられたとして、さいごに、C。これも二つに分かれます。すなわち、河上・孫文の会見を別の角度から確かめうる傍証として、

1、孫文側資料

2、河上側資料

があるかどうか。

私はさっそくA・B・Cの調査に取り組むことにしました。といっても、講義と原稿書きの合い間を縫うてのことですから、スムーズには進みません。しかし、ほぼ四カ月ほどの間に、以下のようなことが確かめられました。

まず、A。「田村生」とは何者か。

河上肇全身の編集担当者だった岩波書店の米浜泰英氏

が、上司小剣の『U新聞年代記』で調べてみたら、と教えてくれましたので、さっそく図書館から借り出して読んでみました。明治時代の読売新聞社を舞台にしたドラマ仕立ての実名小説で、かなりの長編です。なかなかおもしろく、河上肇も登場するのですが、かんじんの田村姓の人物は出てきません。

米浜氏はさらに、高知市の教育委員会にいる友人に問い合わせてくれました。その返事——それは田村全宣ではないか。とすれば、明治十三年生まれ（河上さんより一歳若い）、高知県佐川町の出身で、読売新聞からヤマト新聞に移り、のちに浜口雄幸（いわゆるライオン宰相）の秘書をつとめた。

私はこのことを、高知県の浅野さん（高知新聞の切抜を送ってくれた人）に知らせましたところ、浅野さんはわざわざ佐川町まで行って、佐川町史を調べてくださったのです。その結果、次のようなことがわかりました。

田村全宣、号は逆水。早稲田大学文科卒業後、読売新聞社に入り、後、都新聞社理事兼記者として久しく活躍したが、麗沢会機関誌「霧生関」に寄稿などして郷党に親しまれた。

以上、いかにも無精な私らしい居ながらにしての調

査ですが、読売新聞記者田村全宣の輪廓はだいぶはっきりしてきました。しかし、田村全宣イコール、「田村生」かどうかは、まだきめ手が見つかりません。

ところが高知の浅野さんは、その間に読売本社へ直接問い合わせてもらったらしく、やがてその返事がもたらされました。

読売新聞社編集局情報調査部図書係によれば、河上肇と田村全宣が同時代に読売で活躍したことは、『読売八十年史』によって確かめることができるとのこと、そして私のところへ来た浅野さんの手紙には、大正二年（三年）に編集長をつとめていたという田村全宣氏の写真のコピーまで封入されていました。

かくて私は、河上さんと同僚だったという「田村生」＝田村全宣氏と対面（？）できたわけです。その後、明治四十年の読売新聞に、田村生「哺啜録」（二月二日）、田村逆水「ギャコザ（伊国作劇界の鉅匠）」（二月三日「文芸付録」）といった文章が載っていることもわかりました。

「田村生」のことはほぼ確かめることができましたので、次は、調査事項B。

まず、1。河上肇の読売在社期間と孫文の滞日期间に

重なる部分があるかどうか。

全集別巻の「河上肇年譜」によりますと、読売在社期間は、明治三十九年一月一日から四十年三月末まで。

私の友人の孫文研究家安井三吉氏が作った孫文年譜（一九八五年神戸新聞出版センター刊『孫文と神戸』所収）によりますと、孫文はたびたび日本を訪れています。が、この時期と合致する滞日期间は、明治三十八年七月から四十年三月まで。

したがって、明治三十九年一月から四十年三月までの一年三カ月は、河上さんが読売新聞記者で孫文も日本にいた、ということが確かめられました。「田村生」の「あれは確か明治四十年であった」という記憶も、ほぼ正確だったということになります。

さて次は、2。孫文が下宿していた家、です。

これも安井氏が教えてくれたのですが、当時の外務省の極秘資料（「各国内政関係雑纂、支群ノ部、革命党関」と題した綴り）に、次のようなものがあります。

甲秘第二二六号

清国人転入ノ件

清国亡命者孫逸仙ハ本月廿七日横浜ヨリ牛込区築土八

幡町廿一番地二転入セリ

明治廿九年十月廿九日

警視總監安楽兼道

林外務大臣殿

孫文の行動は、警察に監視されていたわけで、おかげでというのはヘンですが、こんな資料が残っており、孫文の仮寓先は「田村生」のいう通り牛込築土だと確められました。田村氏は河上さんをそこへ案内したというのですから、時期はこの極秘資料に見える明治三十九年十月二十七日以後、ということになります。

さて次は、3。孫文の日本名ですが、これは当時の雑誌『日本及日本人』（明治四十年一月号）に載っていた古一念「人物評孫逸仙」という文章によって確かめることができました。なお、古一念というのは、政治学者増田毅氏（神戸大学名誉教授）の教示によれば、古島一雄のことだそうです。

この文章はなかなかおもしろくて、「支那に擾乱が起れば何人も必ず孫逸仙を連想するが、それも其筈、彼は支那に於ける唯一の革命党主領で、同時に東方に於ける唯一の革命家である」という書き出しで始まるのですが、

次のような一節もあります。本題とは直接関係しないのですが、孫文の面影を伝えているように思いますので、ご紹介しておきましょう。

曾て犬養木堂が彼（孫文）に戯れて「君は酒も吞まず煙草も吸はぬが一体何が道楽なのだ」と問ふた処が、彼は言下に「革命のみ」と答へた。「否それは已に判つて居るが其外の好きなものが浮世にあるだらう」と更に斬込みしに、彼は微笑しつゝ「女です」「其次は？」「読書です」と答へたので、木堂膝を拊て「之ある哉、君にして此言あるは誠に面白い」と深く感歎した事があるさうだ。然り其癖に女道楽をせぬ処は実に妙味がある。

また、次のような一節もあります。

聞くが如くんば某新聞記者は彼れを訪ふて「湖南の暴徒は君の部下云々」と言出で、咄「革命軍を暴徒とは無礼也、余は最早君と談ずるを好まず」と大喝せられたりと。革命家たるもの此意気なかる可からずだ。

この新聞記者、河上肇記者とは何というちがいかと思います。本題にもどって、この古一念「人物評孫逸仙」に次のように孫文の日本名にふれる一節があるので。

（孫文の）最も多く足を駐めるのは日本で、現に牛込築土八幡付近風暖なる処に一家を構へ、己が医者にして革命主義者たるに因みて、高野・長雄と名乗りて静かに形勢を觀望して居るとのことである。

孫文が高野長英（幕末の蘭学者）に因んで「高野」と名乗っていたという事実は、孫文研究家の間ではよく知られていることらしいですが、ここに同時代人による証言があるわけです。

以上で調査事項Bの1・2・3、すなわち記者在職と滞日時期の重複、孫文の仮寓、孫文の日本名のいずれもが、確かられました。あとは、孫文・河上会見の事実を示す別の傍証が、孫文側、河上側の資料にあるかどうかです。

孫文側の資料は、孫文研究家にきいても、今のところないそうです。私もすこし調べてみましたが、見当りません。

河上側の資料はどうか。河上全集には、「自叙伝」「書簡」「日記」（獄中と晩年）にそれぞれ人名索引がついていますが、孫文の名は全く出てきません。なお、明治四十年前後、河上さんは日記をつけておらず（つけていたのかも知れませんが残っていません）、またそのころの手紙はほんのごく一部しか残っていないのです。

さらに、そのころに書かれた論文その他の文章、そしてのちにこの時代を回想して書かれた文章（たとえば、「大福の昼飯―予が在社時代」五卷二七七頁、「読売記者としての回顧―五十年記念のために」十二卷三二〇頁）などにも、孫文のことは出てまいりません。右の回想記などは、当時印象に残ったことを書きしるしたものです。孫文の印象は薄かったのでしょうか。

しかし、と私は思いました。当時河上さんは新聞記者だったのだから、孫文との会見について、「記事」として書いているかも知れない。その「記事」は、孫文が牛込築土に居を定めた明治三十九年十月二十七日以降、河上さんが読売を退社する（それは孫文が離日する時期とも重なるのですが）明治四十年三月末日までの、読売新聞に載っているのではないか。

私はさっそく当時の読売新聞を調べることにしました。

ところが私のつとめている大学は貧乏なので、そんな古い新聞（のマイクロフィルム）は所蔵していないのです。近畿では関西大学にあることがわかり、二日間、関西大学にかよって、マイクロリーダーで読むという、肩のこる作業をしました。

一日目、それらしい記事は出てきません。明治の新聞というものはまことに面白く、本題と関係のない記事をつい読んでしまう、ということもあって時間を費したのですが、本題については、孫文や革命党についての記事が割合多く出てきましたけれども、会見記はありません。ないだけではなくて、革命党はまるでギャング扱いで、こんな論調の新聞にその首領の孫文との会見記など載せることができるのかなあ、と思ってページをめくっているうちに、夕方になってしまいました。

二日目の午後。前日の心配にもかかわらず、目的の記事はようやく見つかりました。日付は、明治四十年二月十二日で、タイトルは「孫逸仙氏の近況」。全文をご紹介します。

昨日閑を偷みて支那革命党の領首孫氏を牛込築土八幡町の僑居に訪へり。全は先づ其健康を祝して更に革命党近時の動静に就いて問ふ処ありしに氏は只だ微笑

して多くを答へず、而かも一言革命は今尚ほ其の準備期に属す、過ぐる日の騷擾も之れを以て既に過去に属したりと見るは非也、活動の見る可きは尚今後にあらんと答へ、且つ革命運動の事実に関しては余の口より自ら多く語るを欲せずと云へり。想ふに氏が胸懷不尽の或る者を蔵せるなる可し。只だ益々頑健に其の温平たる風采の中又おのづから鬱勃たる覇氣の溢れ居るを見て、余は心中竊に志士の倂を偲びながら数日の後再会を期して辭し帰りぬ。

以上が記事の全文ですが、当時の読売新聞の論調とはまったくちがひ、孫文に対して極めて好意的です。またそのこの体・口調からいっても、これは河上さんが書いたものである可能性が強いと私は思うのですが、残念ながら記事のさいごにはカッコして「一記者」とあり、河上肇の署名がありません。

しかしこれが河上・田村両記者が孫文と会見した時の記事であることは、ほぼ確かでしょう。田村氏によれば、河上さんがこの時、中国の「農村問題、農民問題を主として話した」らしいことが、私の注意を惹きます。そして「帰途、支那革命の前途なほ容易でないことを嘆じて

ゐた」ことも、いかにも河上さんらしいと思いました。ところで記事の末尾に、「数日の後再会を期して」とありますが、数日後再会したのかどうか、残念ながらその後の読売新聞に記事はなく、確めるがありません。この日（明治四十年二月十二日）以後の記事をたどってゆきますと、まず三月二十日付の新聞に「孫逸仙氏の所在」と題して、次のような短文が見えます。

久しく我邦に滞在中なりし清国革命党の首領孫逸仙氏は清国官人の追跡甚だ蒼蠅ければ前日横浜より独逸船に投じて新嘉坡に赴き今尚ほ同所に身を潜め居れりと云ふ

そして三月二十八日付の「経済附録」という紙面の末尾に、「河上肇氏」という見出しで、次のような記事が載っています。

豫て一経済雑誌の発行計画中なりしが、愈々来月初旬には初号発刊の準備整ひたる由なり、聞く所に依れば大に保護主義国家主義を唱説し放任主義自由貿易主義商工偏重主義に反対を試むべしと云へば刮目して見

るものあるべく尚博士、学士、政治家、實際家にて其の後援者たるもの多しとの事なれば必ず有力の一経済雑誌とならん

かくて孫文は日本を去り、河上肇は読売新聞社を去ることになります。両雄はただ一度あいまみえただけで、それぞれその生涯をおえたわけです。明治四十年、孫文は四十一歳、河上肇は二十八歳の青年でした。

ところで、河上さんと現代中国の革命運動の間には、深い関わりがあります。

その一つは、中国人留学生を通じての関わりです。河上さんの名を慕って、すくなくならぬ中国人（そして朝鮮人）留学生が京都大学経済学部へ集まってまいりました。彼らはやがて勉学を終えて、あるいは勉学なかばにして祖国へ帰り、革命運動に参加し、その指導者になります。たとえば中国の経済学者王学文は、その一人です（小著『読書人漫語』所収の「王守椿のこと」参照、一九八七年新評論刊）。

二つ目は、河上さんの論文や著書の翻訳を通じての関わりです。一九二〇年（大正九年）前後から、河上さん

の論文や著書がつぎつぎと中国語に翻訳され、中国で出版されました。中国革命の指導者だった毛沢東や周恩来も、河上さんの著作を通じてマルクス主義の勉強をした、といっています。翻訳された著作のリストは、はじめに紹介しました岩波書店の米浜氏に協力を得て、最近の『河上肇記念会会報』に連載しましたので、興味のある方はごらんください。

以上は、中国の革命運動に対して河上さんが専ら影響を与えた側面ですが、河上さんは、一方的に影響を与えただけではありません。中国革命から、影響やばげましも受けました。戦時中、エドガー・スノーの『中国の赤い星』の英文原書をひそかに読んでいたことなどは、その一例ですが、これについてもややくわしく紹介したことがありますので、それをごらんください（一九八二年岩波書店刊『河上肇そして中国―尽日魂飛万里天』）。以上が、中国革命と河上さんとの関わりの主なことですが、それらはいずれも、大正後半期あるいは昭和初期以後のことです。

ところが、孫文と河上さんの会見が事実だとすれば、その原点は明治四十年にさかのぼれることになります。その意味で、この「新事実」はたいへん貴重なのです

が、残念ながら現在わかっていることは、いわば情況証拠のようなものばかりで、確証はないといわねばなりません。しかも両人の交流の実質、その中味についてはほとんど何もわかっておりません。

皆さんの中に、もし何かお気づきの方がおられましたら、たとえどんな些細なことでもけっこうですから、お教えいただければ幸いです。

以上で、私の「まぼろし」のような話を終らせていただきます。

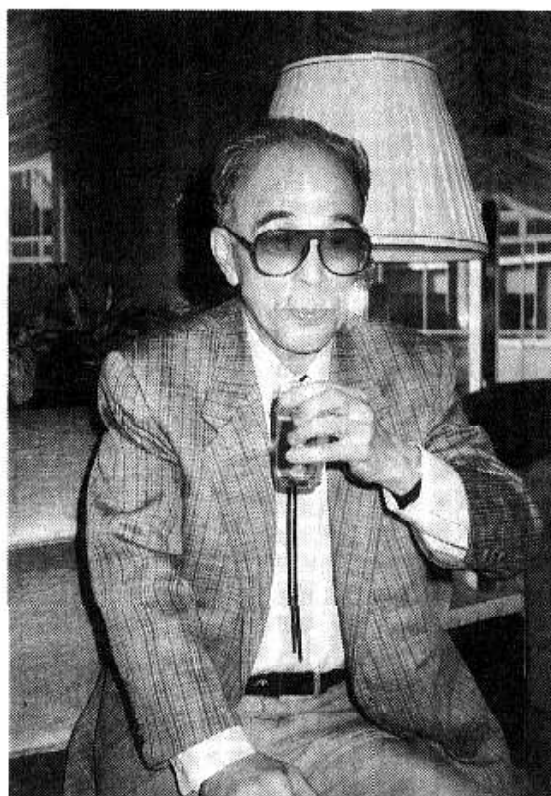
ご清聴ありがとうございました。



河上会 あの人 この人

内田穰吉さん

小嶋 康 生



経済学者・内田穰吉さんは歌人でもある。

その「内田穰吉詩集」には、「わが師たち」という一節があり、吉田松陰・エンゲルスと並んで河上肇博士が詠まれている。

「端然と坐りたまひて」と題する、その歌を引用する。

獄を出でて恥なきわれに 中野なる河上博士 ねもころに ふみをたまひて 東京に出で来る折は 茅屋に 寄れとのみこと ありがたく涙こぼれて おとひなし 河上博士 端然と 坐りたまひて かたはらに長谷部先生 二人して碁を打ちたまふ 一九四一年 思ほえば長谷部先生 若かりしかな (注)

(注) この歌は宮川実が編纂した『回想の長谷部文雄』には「奉悼長谷部文雄先生長歌」となっている。

内田さんは、この日のことを、「河上肇全集月報32」で触れてはいる。さらに根ほり葉ほり聞くことにする。

この老マルキストとは時折、会う機会があるがノートを開いての面談となると双方がかしこまる。背筋を少し

反した、いつもの姿勢は、とても八十歳にはみえないが、最近、目が少しばかり不自由な様子。

「前の晩、あのころの事を回想した」と思い出の糸を繰る。

その時、博士の「茅屋」に案内したのは宮川実夫人であった。宮川実とは和歌山高商時代の教官であり、内田さんの兄貴分的存在だった団迫政夫の師であった。

「宮川夫人の後ろについて緊張しながら博士のお宅に入った。その前年、一九四〇年暮れまで二年半ばかり、捕らわれの身であったことを博士は知っておられ、ねぎらいの言葉を受けた。ただ、ただ恐縮した。『何もしていなかったが捕まりました。私の書いた日本資本主義論争が犯罪だというわけです』といったことを話した」

秀夫人が茶を運んできた。博士の前でかしまっていた内田青年は、ひと息つく。戦後、法然院の博士の墓前で秀夫人と再会する。「あの時の茶のお礼をいったが覚えておられなかった。恐らく多くの人がこっそりと先生宅をつぎつぎ訪れたからであろう」

「お茶の入ったあと歌の話をした。私は花田比露思の弟子で短歌を勉強しています、と切り出した。花田比露

思は和歌山高商二代目校長の花田大五郎氏です。河上さんと花田氏は旧知の間柄で、獄を出られた博士をちよくちよく見舞っていると聞いていた」

この花田大五郎は気骨のひと、内田さんの評価は高い。それもそのはず、和歌山高商時代、全協の事件などに係り、二度も検挙された。この人を放校もせず、かばってくれた。

歌人・内田は、ご自身によると実家は蕉門十哲の一人、各務支考の拓いた美濃派の流れだが、花田比露思の同人誌で手ほどきを受けた。出獄後、歌の本をひもといっておられた博士と話が合った。「この日、先生直筆の、あの、たどりつきふりかえりみればの書を頂戴した。私の家に今、財産があるといえ、この書ぐらい。床の間に折りを見て飾り、往時を偲んでいる」

内田さんは近年、歌誌に「河上肇博士の歌」を数回にわたり連載した。あの日の出会いが出发点であった。いづれ一冊の本に上梓したいという。

「端然と坐りたまひ」た博士に内田さんが相まみえるにいたるにエピソード的な前史がある。

内田さんが毎日新聞の記者だったころ『日本資本主義論争』を著わし、ヒットを飛ばす。出獄後、博士は秀夫

人と谷川温泉に療養にいくが、その時、この本を読まれる。

博士は、留守中の出来事が全部、書いてあるからありがたかったと、この本を届けた宮川実にいわれたらしい。宮川からその話を聞き、彼のすすめで献本をする。

博士は女婿の鈴木重蔵宛の手紙で、「あの本を面白く読んだ当座のことだったので、筆者の噂に興味を感じました。まだ若い青年らしいです」と書き送っている。筆者の噂とは、宮川から聞いた和歌山時代のがんばりであった。

実は、内田青年は一度、博士に会っている。一九三〇年のことだ。学生運動のリーダーだった団迫が上京し、博士の身の回りの世話をはじめた頃である。団迫に会うため上京したさい、博士に紹介しようということで、団迫と一緒に会った。

このときの事を博士は忘れてしまわれたようだ。しかし、「興味を感じた噂の筆者」が、その後、暫くして春日庄次郎の共産主義団の事件に連座したとは知っておられた。それから二年半後、出獄した内田青年に博士は宮川夫人を通じ、「よくがんばった」という慰労の言葉が届けられた。回りくどく綴ったが、それが冒頭の歌につ

ながる。

「獄を出て恥なき」内田青年は、まもなく大阪の日本貿易研究所に職をえる。

博士の高弟である堀江邑一が仲介の労をとった。博士は直接、動けなかったが、門下生が応援した。この日本貿易研究所は博士の弟子や孫弟子たちが数多く集まっていた。ここで経済学者として名をなす『輸出ブラシ工業』をものにする。

いわゆる大阪商大事件の起こるのは一九四三年。博士の学統を受けついだ大阪商大の非戦論者は一網打尽になるが、日本貿易研究所の内田研究員も曾根崎署にもっていかれ、敗戦まで堺刑務所に閉じ込められる。

この事件で弁護人となったのが京大事件の滝川幸辰。内田さんによると、著名な滝川弁護士に弁護を依頼してくれたのが博士だった。

その頃のことを「すぎゆく時代の群像」という一文に書いている。

「(博士は)捕らわれたわたしをあわれみ、当時、大阪朝日ビル十階に弁護士事務所を開いていた滝川幸辰氏に、ひそかに弁護を依頼していただいたことがあった。滝川氏が治安維持法違反の事件を担当されたのは恐らく

コミンテルンからゴビの砂漠をこえて帰国した小林陽之助氏と私だけではなかったか」

後述するが、内田さんの和歌山高商時代の恩師に岩城忠一教授がいた。博士の弟子である。この岩城教授が何かと教え子の面倒をみた。大阪商大事件で逮捕された内田さんのため博士に口添えを頼まれたようだ。

当時の博士について内田さんは右の一文で次のように書いている。

「京都にはこの年の春、河上博士が東京から隠宅を移されていたが、わたしたち若者とは隔絶された存在であった。誰も河上博士の老後をわずらわそうとはしなかったが、まれに博士が人知れず動かれたことがあった」

閉戸閑人の博士は歌ばかりひねっていたわけではなかった。滝川弁護士に紹介の口添えをされたり、人知れず動かれていたのだ。

内田さんが経済学に開眼したのが、博士の『経済学大綱』であった。「高商時代、改造社から『経済学大綱』が出ると学生たちはむさぶるようにして読んだ。私も繰り返し読み、感激した。判らぬところがあると岩城先生のところへ出向き教えを乞うた」

当時の和歌山高商は数多くの優れた教授陣が博士の手で送り込まれた。岩城、宮川、谷口吉彦、古林喜楽、木村和三郎らである。「なかには無茶苦茶の山本勝市といった博士の弟子もおり、教室で『河上博士は、そのようにはいつてない』とやり込めると落第点にされた。時世が厳しく、どの教授も用心深く、宮川氏もリカードまでしか教えなかった」それでも岩城、北川宗蔵教授らが学生運動の飛びっちょりを受け逮捕されながらも健在で、若い学生をひきつけた。

内田さんは「和歌山にこそ河上博士の学統の灯は消えなかった。岩城先生は戦後、学長職を前にして病没されたが、博士の影響を、この地に広められた。

その後、大阪商大に関係するが、ここでも藤田敬三、福井幸治、恆藤恭ら河上学派が大きな勢力をもっていた。恐らく高松高商、山口高商、彦根高商などにも博士の弟子たちが皆を築いていたはずだ」と、あの人、この人の名が上がる。

そして、注文が出された。

「これら河上シュール（学派）の面々は、どう生きたのか。門弟の学者たちは、どんな仕事をし、学生にどんな影響を与えたのか、河上会でも是非、まとめておい

てほしい」

確かに河上山脈は戦後の学界で高くそびえた。その影響力は今日でも深く広い。

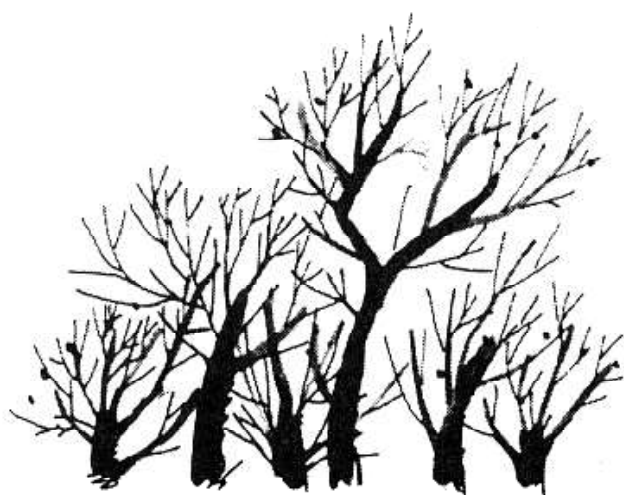
しかし、当の京大では河上学派をカリキュアする学者もいたりする。混乱する社会主義社会のなせるわざである。

今日の世界を、どうみるか。

内田さんは明解であった、一片の疑念もないようであった。

「社会主義社会は大変だが、同じぐらい資本主義社会も大変だ。もっと大変になる予兆はアメリカをみればわかる。勝負は、これからである。

スターリンもダメ レーニンもダメと玉ねぎの皮をはぐやり方は観念的。マルクスも河上さんも間違っていない」



河上肇の小泉信三あて書簡

杉原四郎

一

岩波書店編集部のみ沢泰英氏から、小泉妙氏より提供された小泉信三あての河上肇の書簡四通が送られてきた。全集刊行当時にはみつからなかったが、空襲に遭った三田綱町の書庫に焼失を免れて残っていたもので、いずれも小泉信三が鎌倉に住んでいた大正六―一一年の頃、河上が小泉あてに書き送った書簡（三通が封書、一通が葉書）である。

この時代は二人の学問的交流が最も活発に行われていた時代で、河上は小泉を自分の主張をよく理解したうえで批評してくれる得難い論敵として、福田徳三の愛弟子を高く評価していたが、このような河上の気持ちがこの書簡によくあらわれている。

はじめに比較的短いものを二つ紹介しよう。

一つは葉書で、書かれた年が不明であるが、鎌倉小町

三三一、小泉信三あてだから、大正五―一二年の間であることはたしかである（小泉は大正五年に外国から帰り、震災後間もなく東京へ転居した）。

拝啓、早速委細の御返書賜り、厚く御礼を申し上げます。左様の御事情ならば、当方の計画は中止する事に致さうです。不取敢御礼迄 忽々頓首。

四月念三 河上肇

ここでいわれている「当方の計画」が何をさすのか不明である。

もう一つは封書だが、これも本文に年月日が書いてない。封筒の切手の消印が大正十年であることが確認できる。

拝啓筆硯益々御多様の段奉慶賀候。却説此度は貴著社会組織の批評御恵投被為下忝く拝受仕り候。雑誌に出でし折は、拝見致度と存じながら、そのまま打過候ものも

有之、一書に御まとめ被下候事は、讀書人の幸慶に御座候。不取敢御禮のみ申上度、一筆如此御座候。忽々頓首。

小泉信三様侍史

河上 肇

「貴著社会組織の批評」というのは、小泉の『社会組織の経済理論的批評』（下出書店、一九二二年一月）を指す。諸雑誌に書いた論文をあつめたもので、小泉信三全集第二・第三巻に収録されている。河上肇文庫には、河上の書込みがみられる。

二

つぎに紹介するのは大正六年六月七日づけの封書で、京都市聖護院上り畑四十からの封書である（他の三通はすべて京都市吉田二本松町）。

拝啓、益々御清栄の段慶賀の至に奉存候。扱て三田学会雑誌に於ける拙著の御批評只今拝讀了へ申候。過日新聞紙広告にて題目を承知致し到来を待ち居候處、毎月寄贈を辱くし候同誌今月に限ってなか——参らず、仍而市中に出でて尋ね候も見当たらず候故、一冊取寄方依頼致おき候ひしに、其も未だに参らず、仍而今日登校初めて学校の雑誌にて玉稿拝讀の榮を得たる事に御座候。先ず一讀後の感想を申し候へば、小生は誠に快く御議論を拝聴致候。之は学兄が小生に向つて過分の褒辞を賜り候

ひし事先ず小生の慢心に満足を与へ、小生をして平静に落付きて異説を聴くの餘裕を与へたるがために候はんも、小生只今の主觀に意識致居る所にては、其の主たる原因は、学兄の御批評が常に被批評者の立場を十分に理解したる上の御批評なるに在りと存ぜられ申候。凡て批評は理解を前提とす、善かれ悪かれ先方の言ふ所を十分に理解したる上ならでは眞の批評は爲し難く、而して眞の批評に非らざれば、批評者にとりても被批評者にとりても何の効も無御座候事と存申候。小生は斯かる理由により此度の学兄の御批評を最も満足して拝讀仕候。只今は只一回通讀致候のみ、猶後日落付きて再讀三讀可仕候へ共、不取敢著書に過分の御批評を賜りし事を厚く謹謝致候。

ヘーゲル死の床に横はりていふ、「余を理解せし者天下に唯だ一人ありたり」。かく言ひつつ彼は忌々しげに更に続けていふ、「されど彼も亦余を理解せしには非ず」と。

ヘーゲルの如き豪傑ならずとも、兎角人間の言葉は互に通じ難きものなる事を信じつつある小生は偶々自分の言葉の他人に通ぜしを発見する時、少からざる愉快を感じるものに御座候。此愉快は即ち小生をして茲に此書面を認めしむるに致り申候。御憐察被下度候。忽々敬具。

研究室にて 河上 肇

大正六年六月七日

小泉学兄 侍史

小泉信三は河上の『貧乏物語』に対する書評を『三田学会雑誌』第一一巻第六号（一九一七年六月）に「貧困論―『貧乏物語』を読む―」（小泉信三全集第一巻所収）と題して書いた。河上はこの書評をよみ、小泉が著者の立場をよく理解して書いてくれたことを多として謝意をこめたこの返書をおくった。河上はこの書簡に引いたヘーゲルの言葉を、石川興二に贈ったJ・S・ミルの『自伝』にも書いている。

三

最後に一九二二年一月三〇日づけの封書を紹介する。

拝啓、只今貴書拝見仕候。過日来御挨拶申上ぐべく存居りながら、眼前の仕事に迫られ、相怠り居り居候處、却って貴方より御手書を賜り恐縮に存申候。

御惠投の「三田学会雑誌」は、小生の購讀致居候唯一の経済雑誌に有之、貴論もとくに拝見相了へたる事に御座候へ共、重ねて拝讀可仕候

なほ「改造」御所載貴論に対しては二三号に亘りて卑

見を述べ度存居候。小生の惡癖として論争に際しては、ツイロが悪くなり礼を欠ぎ候個所可不少と存候へ共、別ニ他意あるに非らず、同僚と共に会合して致候討論会にても得て礼を失し候が、小生の惡癖にて実ハ極めて無邪氣なるつもりに御座候間、それらの点は御見のがし下され、吾々互に所見を殊に致候点について本当の論争相試み度、勝手ながら希望致居候。

前号は大部分貴論の紹介のために紙面を割き申候十二月上旬に公刊致すべき次の号にては、貴論の批評を中心と致居候。製本出来の上、十一月号と共に同封拝呈可仕候。

先は御返事かたゞ此の如くに御座候。忽々頓首。

河上 肇

十一月三十日

小泉学兄 侍史

大原研究所にて外国雑誌を御覽を願ふに止まりしは残念と存申候。その外に今少し学問的興味ある文献もありしものと存申候。

小泉信三が『改造』一九二二年二月号にのせた「労働価値説と平均利潤率の問題（マルクスの価値学説に対する一批評）」に対し、河上肇は『社会問題研究』39・

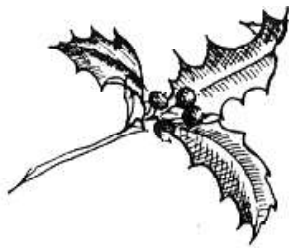
40・41（一九二二年一月・二月・同三年一月）に「マルクスの労働価値説（小泉教授の之に対する批評について）」と題する詳細な批評を発表した。この書簡はこの小泉・河上論争にかかわるものである。「御恵投の『三田学会雑誌』が何号のものは、当時小泉は『三田学会雑誌』に毎号書いていたので、特定しがたい。

四

小泉信三は一九一六年三月に足かけ五年ぶりに欧米の留学から帰国した。独・仏・英・米のうちイギリスに一番長く滞在し、イギリス社会の特質から学ぶところが多かった。同宿していた上田貞次郎のすすめでフェビアン協会出版物の定期購読者になっている。その小泉にとって河上の『貧乏物語』は思想的にも親近感を覚えるところがあったであろう。また小泉は河上の文章を愛好し、一九一八年一月知人への手紙に河上は「小生の知る限りに於ては本邦学者中第一の名文家と存候。……小生は常に河上氏の論旨に賛成するものには無之候へども、其文章は何時も愉快に一読致候」と書いてある。また河上肇文庫には、小泉から贈呈されたつぎの五冊がある。ジェボンス『経済学純理』翻訳（一九一三）『社会問題研究』（一九二〇）、『経済学と社会思想』（一九二〇）、

『社会組織の経済理論的批評』（一九二二）、『価値論と社会主義』（一九二三）。このうち福田徳三のすすめでやったジェボンスの翻訳は、留学中に出了ものだが、他の四冊はいずれもこの河上書簡がかかれた時期に公開されたものである。最後の封書に小泉が大原社研を訪ねた時のこともでてくるが、一九一七年から一九二三年までの五年間は、河上と小泉との関係が最も親密であった時期であった。その意味では、この時期の書簡が小泉の側に四通のこっていたことは、決して偶然ではなかったように思われる。

河上書簡の読解に際し、今回も一海知義氏の御教示にあずかった。記して謝意を表する。



1991年度会計報告

(自1990年10月1日～1991年10月15日)

1. 収 入	会費	375口	1,177,500円
	寄付	31口	355,000
	’90年度総会収入		150,000
	没後45周年懇親会収入		75,000
	” 無葉会分担金		70,000
	会報売上収入		13,200
	預金利子		998
	計		1,841,698円
	前期繰越金		180,080円
	合 計		2,021,778円

2. 支 出	’90年度総会費用	229,452円
	没後45周年集い費用	212,003
	会報印刷費 (No. 35、36、37)	768,396
	会報発送費 (No. 35～38)	524,496
	封筒等印刷費	61,200
	事務用品費	12,826
	通信費 (’90年度総会案内等)	89,582
	振込手数料	21,000
	合 計	1,955,715円

3. 差引次期繰越金 66,063円

4. 借 入 金 1,000,000円

5. 現在手持金 1,066,063円

手持金内訳

郵便貯金	226,998円
振替貯金	224,580
定期預金	500,000
現 金	114,485
計	<u>1,066,063円</u>

【一九九一年度記念会総会】

総会本記と雑感

河上肇記念会（杉原四郎世話人代表）の一九九一年度総会は十月二十日（日）、ゲスト・スピーカーに林直道・大阪市大名誉教授を招き、京都・鹿ヶ谷の法然院で開かれました。

総会には河上博士の長女、羽村しづさん、孫の鈴木洵子さんはじめ会員三十六名が出席。総会に先立ち本堂で法要が営まれ、そのあと全員が博士の墓前に額づいた。

総会では冒頭、杉原世話人代表が開会あいさつ（別項参照）の中で、世話人代表を十年間、務めさせていただいたが、体調を崩して、外出も困難となっており、（これ以上）務めることは無理とします。この機会に降ろさせていただきたい」と辞意表明がありました。杉原代表の辞意は固く、近く開かれます世話人会で、後任の人选も含め協議されることとなります。

このあと議事に入り、事務局から規約改正の提案があ

り、承認されました（新規約は裏表紙参照）。改正のポイントは世話人会の強化で、役割や機能が明確にされたことです。ついで新しい世話人が選ばれました。

選出された世話人は杉原、池上惇（京大教授）、一海知義（神戸大教授）、大門英太郎（千代田商事相談役）、沖本彰（税理士）、紀平龍雄（大阪市立西商業高校）、小嶋康雄^{（注）}（毎日新聞編集委員）、佐田秀男（佐田商事社長）、長砂実（関西大教授）、藤木福太郎（堺精工会長）、藤田整（大阪市大名誉教授）、細川元雄（京都大学）、山本正志（京都市議）の皆さんです。新世話人を代表して池上氏が「会の発展のため努力していきたい」とあいさつしました。

会計報告では（別掲）、「名目上の会員（会報発送）は九百名近いが、年会費の入金は三七五口。したがって会の運営は苦しいが、今年度より督促を強め、いましば

らく会費（年三千元）の値上げをせずにやっていきます」との説明がありました。

議事終了後、林直道先生が「私の戦時下学生生活と河上肇先生」をテーマに講演。このなかで林さんは、河上博士との出会いを熱い感情を込めて語られた（次号掲載予定）。

会員懇談では全員が順次、博士の思い出や近況が語られ、会への注文も出された。最後は大門世話人から「来年も、また法然院でお会いしましょう」とのあいさつがあり、閉会しました。

○ 総会には福岡から麻生泰一・正子夫妻、東京から生沼曹喜（国際技術協力協会）さんが今年も参加、愛知・岡山などからの出席者があり、さながら「全国集会」。いつもながら本山あつての追悼法要があり、梶田真章貫主が、「世の中の動きは思うに任せない。河上先生もさぞ気懸りなことでありましょう。しかし、先生を慕ってお集まりになる皆様方のお心こそが大切なのです。どうか、いつまでも先生に対して変わらぬお気持ちをもってください」といった法話がありました。

○ 会員懇談では最年長の和田洋一さん（同志社大名

誉教授）が「河上先生は素晴らしい方だが、だからといって先生を天まで持ち上げるのはよろしくない。いま、先生の学問も批判するところは批判した方がよい」と問題提起。これに対して西川治郎さん（奥本製粉相談役）、林辰彦さん（読売OB）らが、反論する場面もあり盛り上がる。西川さんといえば和田さんの同志社時代の一番弟子ですが、和田発言に対して「河上先生を絶対視はしていない。ただ、汲んでもつけない、その人間性にお慕いしているんです」とやんわり「師弟対決」。

和田さんのいわんとしたのは、揺れる社会主義社会を目の前にして、甘い河上賛歌でなく、河上経済学の再生に油アセを搾るべきでないか、ということ。同じ思いの人もあったようで、東京からおみえの生沼さんは「学生時代は運動だけで、河上先生の講義も十分、聞けず獄に入った。この年になって勉強会を開いて学習もしている。ソ連が、どうなるか、このことだけでも知りたい」と宿泊先でポツリ。

○ 林直道先生の講演は身ぶり手ぶりも入れ名調子、時に会場は爆笑がまき起こる。謹厳実直を絵にかいたような杉原世話人代表も破顔一笑される。

林さんと河上博士との出会いは、大阪商科大学（現、

大阪市大の河田嗣郎学長の葬儀の時で、学生だった林さんは、瘦せた老人のすがたをチラとみる。それが博士だった。この時の感動を昨日のごとくに表現され、「われわれ学生には、いいようがない純粋な気持ちとなり、死ぬまで真理に忠実でありつづけようと心に誓った」という。そして、その後、大阪商大事件にまき込まれるが、先生の口に乗ると、厳しい獄中生活が、楽しい思い出話のようにするのが不思議。「一寸先は光」といった樂觀主義者ならではであろう。

○ 総会の前に例年のように「いず泉」のお弁当をついてなごやかに懇談が続きました（注釈をつけますと、総会費が五千円もしますのは、この弁当代のため）。今年も山下孝次郎さんから般若湯と、博士の好んだ進々堂のあんぱんの寄贈がありました。また、長野の両角康則さんからリンゴ一箱届けていただきました。同封の手紙では「台風で農家の被害は大きかったが、私のところはハヶ岳蓼科山の連山が壁となり助かりました」とありました。地元の末盛博己さんからは梅酒と梅干が届けられました。これは博士の墓地に実る梅の実を採り、梅酒と梅干にしていたいたものです。これらの品々は本堂でお供えしたあと出席者全員でおすそ分けしました。ゲ

ストの林先生は、あんぱんをほうばりながら「河上会は、いろんな方のお力でなりたっていますね」と感心しておられた。（事務局 K・K）

開会挨拶 杉原四郎

昨年、皆さんとこの会場で山下肇さんのお話を伺ってから一年が経ちましたが、今日、皆さんのお元気な顔を拝見することができて、嬉しく思っております。私は今年の三月、急性腎不全とネフローゼという厄介な病気に取りつかれました、約三カ月入院しておりました。お陰様で腎臓の方はほぼ全快したのですが、なにぶんこういう不自由な体が三カ月も寝ておりますと一層不自由になりました、外出することが益々困難になりました。家の中で本を読んだり、ちょっとした物を書いたりすることとは出来るようになりましたが、この会の世話人代表を務めさせていただくことはとても無理だと思ひまして、この機会に世話人代表を降りさせていただくことをお願いし、過日の世話人会で了承いただきました。この総会でも皆様の了承をいただきたいと思います。この総会でも皆様の了承をいただきたいと思います。

この会の最初の世話人代表はご承知の通り末川博先生で、先生のお亡くなりになりました後、同志社の住谷悦治先生が世話人代表をお務めになりました。一九七九年に河上肇生誕百年の行事が盛大に行われましたが、その時には住谷先生はまだお元気で、挨拶もなさったかと思えます。その後まもなくご病気になられ、この会場にお出ましかれたことが出来なくなりました。それで一九八一年でしたか、今から丁度十年前に住谷さんの後を引き継いで代表にならせていただいた訳でございます。

その後の十年間を振り返りますと、その間に三つほどの行事がありました。最初は一九八六年、河上の没後四十年と河上肇全集の完結を記念して、本会は立命館の末川記念館と大阪で二回の講演会を開いたのです。河上肇全集は丁度私がこの会の代表になりました頃から岩波で始まりまして、約四年かけて完結しました。もともと一九七九年の生誕百年に第一巻を出すというのが目標だったのですが、ご承知のように筑摩書房が倒産するという、そしてその後を急遽岩波書店が引き受けるということになりました。スタートが二年ばかり予定より遅れました。しかしスタートしてからは順調に進みまして、一期・二期あわせて三十六巻の全集が完結した訳であります。そ

こで全集の記念と河上没後四十年とを記念して、私が代表になりました。初めて、やや大掛かりなイベントをやったのです。

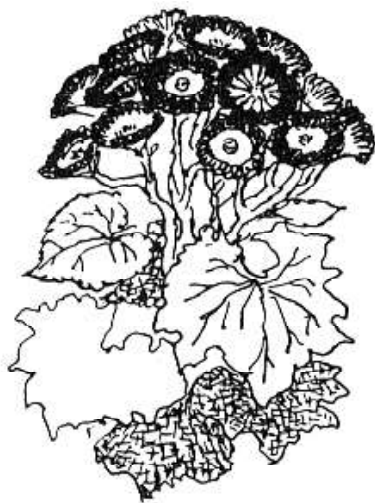
次は一九八九年の生誕百十年で、前の生誕百年から十年が経ちました。その一九八九年が河上もその創立に係っていた京都大学の経済学部が大正八年にスタートして七十年目にあたるので、これをあわせて記念して、これは一九七九年の時もそうだったので京都大学の法経教室で記念講演会を行いました。その時は山口・東京の河上会、それに本会とが共催という形で行いました。

それからもう一回は今年であります。河上が亡くなって四十五年、この激動期にその年を迎える意義を込めた行事をやろうということで、この五月に大阪で、舞葉会と共催で記念講演会を行いました。私はその頃入院しておりましたので出られませんでしたが、大変盛会であったと後で聞いて大変喜んでおります。

このように一〇年間の間に幾つかのイベントをやりましたが、この会の基本的な行事としては毎年ここで、十月の二十日、河上の誕生日の前後にこの法然院での法要を兼ねて総会を催すということ、それから会報を年に数回出して皆様方にお送りするということが、この二つが主

たる行事であったのですが、この度、あとで紹介されるでしょうが、新しい世話人の方もお加わりいただきまして、この会を更に発展させることを考えていただいております。ただし今申しましたようにこの法然院での会合をやはりひとつの柱として続けて行きたい。それから会報もやはり今後も年に数回、皆様のお手元にお届けしたい、こういうことを思っております。これまでは区切りの年には十月の会合の外に大阪とか京都とかで別に講演会を持っておりますが、それ以外の年は大体この会だけです。しかし十月のこの時期は皆様お忙しくて、特に日曜ともなりますと学会とか他の行事が重なるということで、年に一回しかないこの会合に出られなくて残念だという声を聞きます。それで私どもとしては出来れば年にもう一回、この十月のほかの季節に他の適当な場所で何らかの集まりを持ち、皆様とお顔を合わせる機会を持って行きたいということを考えております。それから会報の方も出来るだけ編集者を交替制にしまして、それぞれ編集者の方の創意で一層内容を充実し、また出来るだけ皆様方の寄稿をよりたくさんいただいて、会員相互の繋がりをふかめ河上記念会の一層の発達につとめて行きたいと思っております。

私も皆様方のお許しがいただけるなら、この日をもって十年間務めさせていただいた世話人代表を辞めさせていただきますが、今後も一会員としてこの会の為に出来るだけご協力申し上げたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。長くなりましたが御挨拶と致します。どうもありがとうございました。(拍手)



編集後記

一九九二年を迎え、会員諸氏の御健康と御活躍を祈願し、今年もよろしくお願い申し上げます。

世界的にも多難な一年でしたが、河上肇記念会にとりましてでも多忙で記憶に残る一年でもありました。河上肇没後四十五年記念の集いを開催したこと、それに杉原四郎世話人代表のご病気による世話人代表辞任が主たるものです。詳しくは前号及び本号「一九九一年度記念会総会」の記事をご覧下さい。

一〇年余にわたり世話人代表を務めていただきました杉原先生に心からお礼申し上げますとともに、先生の日も早い御快癒を会員一同が願っております。ありがとうございます。

八月三十一日に新世話人準備会、十一月一日に世話人会を持ち、いろいろ話し合いました。後任世話人代表はまだ決定しませんが、会員諸氏の御鞭撻御指導をお願いいたします。

久しぶりに会計報告をしました。事務局財政が逼迫しているのは一目瞭然です。会則の通り本会は会員の会費と寄付金で運営しております。振替用紙を同封しており

ますので本年度会費納入お願いいたします。なお事務局合理化のため今年度より領収書送付は割愛しますので、ご了承下さい。

次号会報は順調にいけば四月にお届けできると思います。次号は置塩先生の「現在の資本主義と社会主義」・林先生の「河上肇詩注余話三」のほか懸案の「会員名簿」・「私の戦時下学生生活と河上肇先生」・「河上肇記念会会報総目次」等も予定しています。やや分厚いものになるかと思いますが、ご期待下さい。「山宣会会報二六号」というのが送られて来ました。こんな会がありこんな行事をやっているんだという感慨を持ちました。関心がある方もおありかと、折角ですから概略を紹介します。

○第2回山宣会講座 山宣の性教育の今日的意義

九二年二月二十九日午後～三月一日昼

京都宇治 旅館「花屋敷」 一泊二食二万円

○九二年墓前祭 三月五日（木）正午～午後一時

なお事務局は同志社中学（小田切氏）となっています。会報は会員全体のもので、皆様の投稿を歓迎します。会費納入の折り、振替用紙に近況報告や会報感想・注文等もご記入下さい。（事務局 紀平生）

入会のすすめ

河上肇記念会は、一九七三年に発足して満十九年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

〒571 大阪府門真市元町二―二四

沖本彰税理士事務所内

河上肇記念会

電話 (〇六) 五〇六―八〇三八

振替口座大阪 三―三一―一九五

改訂

河上肇記念会 会則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪（または京都）に事務所を置く。
- 二、この会は河上肇先生の人格とその業績を称え、これを広かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
- 三、この会は河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人々を会員とし、資格や政治的立場を問わない。会員になろうとする者は文書で事務局へ申し込む。
- 四、毎年一回総会を京都で開き、会報発行・集会およびその他の事業を行う。
- 五、この会の運営発展のために世話人および必要に応じて顧問を置き、総会において選出する。
世話人代表は世話人会で選出され、この会を代表する。
世話人中の事務局担当が事務を執行する。
世話人の任期は二年とし、重任はさまたげない。
- 六、この会の経費は会費ならびに寄付金をもってあてる。
会費は年額三千円とする。
- 七、会則に定めなき事項については世話人会で決定する。
- 八、この会則の改廃は総会の決議による。

